人生の先達の声に若者関心

50歳以上を対象とする立教セカンドステージ大学では、少人数のゼミが必修科目になっている。最近は「木下ゼミ」のように、ゼミを担当教員の名で呼び合っていて、10ゼミが開講されている。これが帰属意識をもたらす。大組織よりも十数人程度の小集団の方がメンバー間のやり取りも密で、アイデンティティーにもつながるからだ。

ここ数年、セカンドステージ大のゼミ生に学部生の講義に来てもらって、入学の動機やキャンパスでの過ごし方などを話してもらっている。限られた時間だが、世代を越えた交流の機会になっている。

2012.9.3

まなぶ　世代越えて

先日も100人強の学生を前に、50代後半から70代後半のゼミ生たちが自分を語り、学生時代の過ごし方などをアドバイスしてくれた。それぞれの個性が反映された歯切れのいい発言には爽快感があった。

静かに聞く学生たちと好対照で、人生経験を重ねることとは自分の言葉を持つことだと実感した。まだ社会に出ていない学生たちにとっても、人生の先達たちから話を聞く機会はめったにないことなので、とても興味深そうな様子だった。

さて、やり取りの中で、「自分は今学ぶ楽しさを実感している」という発言が、セカンドステージ・ゼミ生の一人からあった。学校に通い、勉強することを当たり前のことのようにしか感じていない学生たちは、ハッとしたようにみえた。

ゼミ生は、仕事や介護を含めた家族の責任を果たし終え、自分のために新しい知識を吸収できる今の生活を「学ぶ楽しさ」と表現したのである。

実感を伴う人の言葉にはリアリティーがある。経験したいと思っても大抵は願望であり、自分にとって「いま・ある」ものという時間は得難い。むろん、楽しさの意味は変わっていくであろうが、実感したことはその人の中に残り、楽しさの中身を充実させていく。

学ぶ楽しさを実感することは、個人の努力だけでは難しい。配慮と工夫を凝らした社会的な場が求められている。

（立教大学教授　木下康仁）